日本映画を世界商品に変えるために

映画の未来は、テレビ、DVD、ビデオゲーム、ブロードバンドなどのメディアが発展する限り明るいといえるでしょう。なぜなら映画は、最新のデジタル技術の結集に見られるように、人間の映像表現の最高形態であり、メディアの中でワンソースマルチユースのビジネスの核として機能しているからです。

経済、情報のグローバル化の進展は、共通言語としての映画の価値を、ビジネスと文化の両面で飛躍的に高めております。金融、法律の知識とデジタル技術の普遍化によるビジネスの拡大とともに、グローバル化は民族、宗教、歴史、神話などに根ざす固有の文化、私たちのアイデンティティそのものを深く問うものでもあります。

産業化した映画において、ビジネスと文化は一体です。ハリウッド映画の圧倒的なビジネスは、私たちをアメリカ文化の渦の中に投げ込んでいきます。それは、私たちが何ものであり、日本の文化がどのようなオリジナリティと普遍性を持っているのかを、私たちが確信し、世界の多くの人びとに伝える方法として映画がいかに有効であるかを示しています。

日本の来るべき社会が、知識を資源とした、知識労働者が中核の働き手となる社会であるのなら、知的財産の集積であり、人びとの望みの投影ともいうべき映画を、今ほど明晰に戦略的に創造していかなければならない時代は無いと思います。

日本の映画は何が足りないから、未来を語り得ないのか。世界商品となり得ないのか。金融、法律、配給、宣伝などのビジネス環境。進化するデジタル技術。そしてテーマの普遍性と表現の独自性など物語創造と映像言語をめぐる文化的命題。それぞれの働きとバランスを明晰に分析し、全体の関係性を変えていく中から形を生み出していく……。

求められているのは、映画におけるマネジメントであり、文化の戦略と法律、金融の高度な知識と技術を自在に駆使するプロデューサーなのです。産業としての映画を研究する学問の確立に向けてネットワーク作りを一緒にしませんか。多くの優れた映画人の経験や暗黙知を形式知に変えマーケティングやケーススタディを可能にする装置作りとその成果としての学問の発展がなければ、日本映画を世界商品に変えることはできません。「映画は世界を幸せにする」まさにソフトパワーとしての映画の振興にお力をお貸しください。

学校法人東放学園
映画専門大学院大学設置準備室
準備室長　高橋克三